

Report

アセスメント活用研究会 2019

～学生成長に寄与する学修成果の可視化をめざして～

内部質保証や学生と企業の適切なマッチングが求められる現在、学生の学びや成長を可視化するアセスメントへの注目が日に日に高まっている。大学にとって、そして何より学生にとって、より効果的なアセスメントの活用法を検討する当研究会は2年目を迎え、前年を大きく上回る80人の大学関係者を集めた。

開催日

2019年11月2日(土)

会場

武蔵野大学有明キャンパス

目的

学修成果の可視化やアセスメントポリシーの活用等の「大学組織としてのアセスメント活用」について、また、学修者本位の教育の質向上のための「学生への効果的な活用方法」についての検討。

参加申込大学

愛知工業大学、青森中央学院大学、宇都宮大学、桜美林大学、大阪医科大学、大阪経済大学、大阪大学、岡崎女子大学、小樽商科大学、神奈川大学、関東学院大学、京都産業大学、杏林大学、九州大学、慶應義塾大学、工学院大学、神戸女子短期大学、駒澤大学、札幌大学、成蹊大学、聖心女子大学、西南学院大学、専修大学、創価大学、高崎商科大学、東京家政大学、東京工芸大学、東京農工大学、東邦大学、東北学院大学、獨協医科大学、新潟食料農業大学、日本歯科大学、比治山大学、福井工業大学、平成国際大学、北海学園大学、北海道科学大学、武蔵野大学、明治大学、名城大学、立正大学、龍谷大学、早稲田大学 ※50音順

アジェンダ

1. 開会・ご挨拶

2. 事例発表

「大学改革につなげるIRによる支援とは」

東北学院大学 学長室 齋藤 渉 様

「工学院大学における初年次ライティング教育の事例」

工学院大学 教育推進機構国際キャリア科 教授
キャリアデザインセンター 所長
教育開発センター 主幹 二上 武生 先生

3. 分科会

分科会A「大学組織としてのアセスメント活用」

分科会A-1

札幌大学 企画部 部長 秋山 一二三 様

獨協医科大学 教学IRセンター 医学教育点検推進室
山岸 秀嗣 先生

明治大学 教務事務局 商学部事務長 堀内 健 様

分科会A-2

専修大学 教務課 IR担当 西山 慶太 様

北海学園大学 学習支援システム課 竹田 直弘 様

分科会B「学生への効果的な活用方法」

分科会B-1

大阪経済大学 教育・研究支援・社会連携部 黒正 洋史 様

東京工芸大学 就職委員長 産業カウンセラー
山田 勝実 先生

分科会B-2

桜美林大学 IR・アーカイブスセンター 部長 鳥居 聖 様

平成国際大学 法学部教授 IR・FDS・キャリア
佐々木 孝夫 先生

4. 本日のまとめ



事例発表

大学改革につなげる
I Rによる支援とは東北学院大学
学長室 齋藤 渉

■ 意志決定や課題解決の陰に I Rあり

漠然とした問題意識を、大学全体、学部学科や部局、授業単位それぞれのレベルに具体的な課題に落とし込む。将来目標から、現在やるべきことを割り出す。複数の施策の効果を比較する。こういったことが、意思決定支援機関である I R が受け持つ役割だと言えます。

今後本格化する東北地方の18歳人口の急激な減少を見据え、本学は2016年度に I R 担当部署を立ち上げました。大学の意思決定を支援する機関としての実効性を持たせるために、教育・研究と管理運営の双方に関連する学長室に設置。「教育、研究、経営の課題が見つかった際、学長は適切な措置をとらなければならない」という規定も設けています。

I R に集積したデータは学内のコミュニケーションツールとして活用されており、一つの課題に対し、教職員が部署を越えて取り組むことも珍しくなくなりました。またデータによって中長期計画の進捗を把握できるので、PDCAサイクルがこれまで以上にスムーズに回っています。

■ DP到達度をアセスメントで検証

2020年度からは、教学マネジメントを支える基盤として I R の機能強化をすることになっています。そのためには学修到達度の検証や教育成果の可視化が欠かせません。GPS-Academicは本学が掲げるディプロマ・ポリシーの一つ、「汎用的諸技能能力を活用できる」の達成度の測定などを目的として、アセスメントを導入するに至りました。入学時、3年次後期、卒業時に実施し、大学、そして学生自身が能力の変化を確認します。相互評価協定を締結している西南学院大学とも共同し、双方の大学教育の特色を探っていくことも検討しています。

I R の意義は、学生を成長させること、また、改革を促進して学内の教育・研究を効率的かつ効果的な充実を図り、その成果を社会に還元することにあるでしょう。本学の取り組みはまだ始まったばかりですが、皆さんと知見を交換し合いながら、その意義を発揮できるような I R にしていきたいと考えます。

工学院大学における
初年次ライティング教育の事例工学院大学 教育推進機構 国際キャリア科 教授
キャリアデザインセンター 所長 二上 武生
教育開発センター 主幹

■ 初年次教育における思考力育成

本学は理工系4学部を抱える大学です。「社会・産業と最先端の学問を幅広くつなぐ『工』の精神」を建学の精神に掲げ、理工系の専門知識、思考力、表現力・発信力の育成に力を注いでいます。その一環として、2014年から1年次の授業に「ロジカルライティング」という科目を導入しています。

この授業は必修ではないものの、1年生の8、9割の学生が受講しています。育成する力は論理的思考力、チーム協働力、キャリア観。前期は繰り返しレポート執筆を行ない、教員のフィードバックを受けて理工系学生が苦手意識を持つ“書く”ことに慣れ、その方法論を身につけます。後期はテーマをプレゼンテーションに変え、やはり反復練習によってプレゼンテーションスキルを磨きます。“書く”ことや“発表する”ことをとおして、自分の考えを表現し、考えを深めるための“思考のステップ”を学ぶことがねらいです。

■ アセスメントを生かした授業づくり

2018年にGPS-Academicを導入しました。単にアセスメントを導入するだけでは意味がなく、授業に生かすことこそが重要だと考えました。GPS-Academicの問題やルーブリックを見たところ、ロジカルライティングにおける育成項目、特に学生の伸びが見えづかった「説得力」と親和性がありました。そこで、GPS-Academicの思考力のルーブリックをロジカルライティングの教育内容に基づいて解釈し直し、そのルーブリックのもとで学生のレポートを評価するよう授業の体制を変更しました。

なお本学では、GPS-Academicは入学前教育で受検しています。入学前に受けたアセスメントと同じ評価基準で、前期・後期にわたって思考力や表現力を伸ばす授業を受け続けます。その結果、学生は成長実感を持ちやすくなり、学修行動も変わるだろうと期待しました。

アセスメントの活用にあたって重要なことは、アセスメントの特性を見極め、評価内容を正しくとらえること。解釈や変換を挟みつつ、その内容を大学が教育したい力と関連付けることで、有効な活用方法が見えてくるのではないのでしょうか。



分科会 A-1

▶ 大学組織としてのアセスメント活用

最大限に活用するための施策とは

【参加校】 大阪医科大学 岡崎女子大学 小樽商科大学 神戸女子短期大学 駒澤大学 札幌大学
 聖心女子大学 専修大学 高崎商科大学 東京家政大学 獨協医科大学 新潟食料農業大学
 武蔵野大学 明治大学 名城大学 早稲田大学 ※50 音順

(司会 ベネッセ i-キャリア)

テーマ1 活用の主体となる組織づくり

分科会 A-1 では、アセスメントの活用を推進するにあたって、IR組織をいかにつくるか、受検率をどう高めるかといった話題が議論された。

最初は札幌大学が自学の取り組みについて発表。札幌大学は入学後に専攻を変えることができ、実際に学生の4人に1人が、2年次に専攻を変えている。今後、所属する専攻に加え他専攻の科目にも興味を持ってもらうため、専攻を横断した学びとしてアクティブ・ラーニング科目を充実させる。さらに、そこにアセスメントを加えることで、自身の強みを振り返らせ、思考力や姿勢・態度を伸ばしていくという。また、選抜コースは定員制とし、その選抜にGPS-Academic のスコアも用いるほか、自由記述欄を用いて中退予備軍のケアをするそうだ。アセスメントを大学改革の様々な場面に活用する例として、多くの参加校の関心を買っていた。

次の話題は、IRの組織づくりについて。参加校の中から「認証評価の観点に内部質保証がより強化されることもあって、実質的に機能する組織づくりの例を知りたい」という質問が上がったためだ。この質問に解答したのは、獨協医科大学。獨協医科大学は2018年に「教学IR推進室」を「教学IRセンター」へと組織変更し、合わせて規定を設け、センターを学長直属の組織と位置づけた。センターの調査・分析対象は、入試、学生の学修時間、留年・退学、キャリアなどと多岐にわたる。そして収集したデータを、大学執行部・教学マネジメント委員会、教務委員会、入試委員会など、各組織の要望にあわせて提供しているという。いわばセンターが、情報のハブとして機能している形だ。

ポイントは、センターの上位に「教学IRセンター運営委員会」という上位組織を設け、副学長、各学部の教務部長、教学IRセンター教員および事務を委員にしていること。これらの教員は他の委員会の委員でもあるため、センターと他の委員会とのやり取りが迅速に行うことが可能となる。それでも解決できない問題は学長のトップダウンで解決できる。学内の各組織が連携しやすいルートをつくるのが重要だろうと、獨協医科大学は発表を兼ねて説明していた。

テーマ3 GPS-Academic と GPA の関係

残る発表は明治大学商学部から。ゼミ教育に力を入れ、教養ゼミと専門ゼミの2つの科目を設けている同学部は、この2つのゼミがどのような教育成果を出しているのか検証するためにGPS-Academicを導入したという。

特徴的だったのは、学内のGPAとGPS-Academicのスコアを掛け合わせて分析していた点だ。GPA上位層は「思考力」が高く、下位層は低く出ており、分析中ではあるものの一定の関連性はあるそうだという話は、他大学関係者もかなり興味津々だった。

また、学部の特色的な授業の成果検証も進めており、アクティブ・ラーニング系の授業を受けた学生は、受けていない学生と比べて、学びの意識や姿勢に大きく変化がみられるそうだ。これら先進的かつ実践的な取り組みに参加者の関心も大変高く、各々にメモを取りながら聞き入っている様子が見られた。

テーマ3 入試・広報にも生かせる？

ディプロマ・ポリシーとアセスメントをどのように関連させるかについての議論も白熱した。ある大学は「ディプロマ・ポリシーは自分たちで設定したもので、アセスメントはそうではない。だからこそ、本当に一致しているのか、学内での意見が分かれてしまいます」と苦勞を話した。このような悩みを受けて専修大学は、ディプロマ・ポリシーとアセスメントがどのように対応しているか、ディプロマ・ポリシーの観点、思考力、姿勢・態度、経験について整理した取り組みを紹介。どのような視点で関連付ければよいのか、他大学へとヒントを示した。

最後に、アセスメントを入試・広報に活用する方法について、いくつかの大学が意見を交わした。例えば駒澤大学では高校向けのデータブックを制作していて、入試区分別に学生の思考力、姿勢・態度などを掲載し、高校への営業で活用しているという。また札幌大学は、同大学の調査でわかった「出身高校の偏差値に関わらず、思考力が高い学生は存在する」ことは、学力一辺倒ではない活躍できそうな学生の評価に生かせるのではと高校に営業しているそうだ。



分科会 A-2

▶ 大学組織としてのアセスメント活用

活用の土壌づくりから実践まで

【参加校】 宇都宮大学 岡崎女子大学 桜美林大学 関東学院大学 京都産業大学 神戸大学 成城大学
 西南大学 専修大学 東京工科大学 東北学院大学 福井工業大学 北海学園大学 ※50 音順

(司会 ベネッセ i-キャリア)

テーマ1 I Rに対する3つの視点

A-2 分科会に参加したのは 13 大学。教育開発センター、I R、自己点検・中長期計画に関わる部署の担当者らが集まり、大学組織としてのアセスメント活用について意見を交換した。

A-2 分科会の最初の話題は大学における I R の意義や役割について。「アセスメントの取り組みに I R が関与することを可能とする、組織体制や関与時期等について、可能な範囲でお話をお伺いしたい」といった、成城大学の質問から始まった。これに対しある大学担当者は、「本学の I R は、高等教育センターの一組織として位置づけられています。そのため F D や教務部門と連携を取ることが多く、アセスメントについて触れるうちに『もう一緒にやってみようか』と話が進みました」とのことだった。

I R については「持続可能性」と「合同 I R」に関する意見交換も盛り上がっていた。例えば成城大学は私立大学等改革総合支援事業タイプ 1 や認証評価などへの対応がきっかけとなって I R を組織したが、今後も継続的に、いかにスムーズかつ効果的に I R を進めていくか、全体会で東北学院大学の発表が参考になったと話していた。また分科会 A-2 に参加していた西南学院大学では、東北学院大学との共同 I R も見据えた大学間相互評価を実施する予定にしている。その背景について質問されたところ、「同じキリスト教系の大学であることに加えて、規模や学部構成などの共通点も多いことから、昨年 11 月に相互評価に関する協定を締結することになりました。まず 2020 年度は学生の「ボランティア活動」について相互評価を実施するとともに、「GPS-Academic」をはじめとしたアセスメント・テストの結果についてもベンチマーキングを行う予定です」と説明。大学間で実際のデータをやり取りし、共同で改革を進めていくという新しい取り組みに、多くの大学の興味を引いているようだった。

テーマ2 DP を内外へと浸透させる取り組み

次の話題は、「ディプロマ・ポリシーの達成状況の可視化」。まず、既に取り組みを行っている専修大学から発表が行われた。専修大学は設定しているディプロマ・ポリシーごとに、それぞれがアセスメントで測る力とどのように対応しているか、対応表を制作している。これにより、思考力のスコアの推移を分析することで、ディプロマ・ポリシーの達成

状況が良好か否かを評価できるようにしていきたいという。また、京都産業大学はアセスメント・ポリシーをホームページ上で公開しており、その中でディプロマ・ポリシーをどういった視点で分析するか方針を掲げている。現時点で、大学全体のレベルで取り組んでおり、今後は学部レベルでの取り組みをさらに進めていくことを検討する必要がある。

専修大学の取り組みに対しては、「第三期認証評価以外の場面でも活用する予定があるのか」という質問が上がった。これに対しては、「第三期認証評価では内部質保証の組織体制とその構造を示すことが求められていますが、第四期認証評価では、さらに具体的な学修成果の測定・可視化が求められると予測しています。したがって、今回ご紹介したような外部評価・直接評価を用いた学修成果の測定・可視化の方法はこれに対応するために有効だと考えています。」と解答していた。

テーマ3 期待の一方で、克服すべき課題も

2 つめの発表は北海学園大学から。アセスメントの具体的な活用方法として、学修の動機づけ、面談時の補足資料、入試の選抜機能の確認、教育プログラムの効果測定など、複数の取り組みを話した。

その北海学園大学は、1～3 年生の 3 学年にアセスメントを実施している。どのように受検率を高めているか、他大学から質問されたところ、「1 年生は入学後のガイダンス期間中に学内で受検させています。2 年生は保護者向けに文書を出して、保護者からも受検を勧めてもらうように。3 年生はキャリア科目の中で案内をしています。2～3 年生は自宅での受検としていますが、十分な受検率を保てていると思います」と回答していた。

分科会の終わりには、GPS-Academic のメリットと、いくつかの要望について議論が行われた。例えばスコアが連続変数で返却されることは明確なメリットで、分析に使いやすいという声が多かった。また、「学生カルテ」を使った個別学生支援に前向きな大学も多数。一方で、分析手順に関するマニュアルがほしいという声や、学内へのデータ説明をどのように行くと効果的か知りたい、といった声も。後者に対しては、ベネッセ i-キャリアの社員からも現状の問題点が提起され、対策していくことの必要性が確認されていた。大学での活用だけでなく、GPS-Academic の今後の発展にも寄与する分科会となったようだ。



分科会 B-1

▶ 学生への効果的な活用方法

成長の喜びをもたらす可視化

【参加校】 青森中央学院大学 大阪大学 大阪経済大学 桜美林大学 駒澤大学 成蹊大学
 聖心女子大学 西南学院大学 創価大学 高崎商科大学 東京家政大学 東京工芸大学
 日本歯科大学 比治山大学 北海道科学大学 名城大学 龍谷大学 ※50音順

(司会 ベネッセ i-キャリア)

テーマ1 スコアが示す学修成果や指導の観点

冒頭に、いずれもアセスメント結果を自学の取り組みと結びつけて分析している3大学より事例発表が行われた。

大阪経済大学は、「実践的な思考法を身に付け現代社会の諸問題を発見し、課題解決の道筋を立てることができる。」というディプロマ・ポリシーと測定項目が一致していることから、2019年度に GPS-Academic を導入。オナーズプログラム受講生（大樟塾）の思考力が伸びていることを確認できたという。今後はアセスメントの結果を含めた学内データを突合させ、就職先データと結びつけて、活躍人材を可視化する予定だ。

同じくキャリア教育・就職支援に力を入れている東京工芸大学。工学部で実施したアセスメント結果を4年生の進路決定月とクロス分析したところ、夏休み明けの進路決定者の「経験」スコアは早期に進路を決定した層より低いことがわかった。これを受けて、低スコアの学生のキャリア支援を重点的に行っていることが報告された。

大阪大学は、2019年4月より少人数初年次ゼミ「学問の扉」を全学必修で実施している。その1クラスにおいて GPS-Academic を実施し、ゼミの議論が批判的思考力を高めた可能性がある事を確認した。また最近、レジリエンスやコミュニケーション能力の評価にも注目しており、失敗すると落ち込んで研究室にこなくなったり、他者と協力し合うのが苦手だったりする学生のケアに活用できないか模索しているという。

テーマ2 アセスメント実施に適した時期とは

ディスカッションは2大学からの質問で幕を開けた。大学生生活全体の学修成果を測定する目的でアセスメントを実施する青森中央学院大学は、3年生か4年生かで実施学年を迷っているという。成蹊大学は現在実施中の3年生に加え、次年度は1年生に実施するにあたり、実施時期について他大学の意見を聞きたいとのことだった。まず各学年で実施している大阪経済大学が、その時期を紹介。「1年生

は入学前、2年生はアセスメント結果をゼミの選択に活用することから春、3年生は就職活動への活用を考えて秋、4年生は大学生生活の成果を測る意味で12～2月に実施を予定しています」。これに東京工芸大学が「3年生後期は学びが十分に蓄積しており、アセスメントに適したタイミングだと考えます」と続いた。

大阪大学は、学生が自身の成長やポテンシャルを感じられる時期に実施することが適切であるとしつつ、次の意見を付け加えた。「上位学年で受検しても、全ての項目が高いスコアが出るとは限りません。そうした学生に対して、良いところを指摘するフォローアップの機会を設けることが必要でしょう。学生が自信をもって社会に出ていけるようにすることが大切です。」

テーマ3 成長を促す取り組みを考える

後半は、冒頭の事例発表をふまえ、大阪経済大学や大阪大学のように学生のアセスメントのスコアを伸ばすためにはどんな取り組みが効果的なかが議論の中心になった。

大阪経済大学のオナーズプログラム（大樟塾）では、就職活動を通じて明確な自己成長を設定する。問題解決や意思決定に関する課題をチームで取り組み、ひとり一人が発表するいわゆるケースメソッド形式で進められる授業は、総合的な思考力を鍛える。このような大樟塾の環境は、学生同士の成長が確認しあえることが学生全体の意欲となり、積極的な学びから主体的な学びへと変化する。

また、大阪大学の初年次ゼミ「学問の扉」の当該クラスでは、企業からの課題に対し学生が解決案を提案する PBL を実施した。「中間報告で企業の人からロジックの未熟さや裏付けの弱さを指摘され、学生たちは理由付けや論理性を徹底的に議論するようになりました。あの人ならここまで指摘するだろうと想像しながら準備することが、批判的思考力を伸ばしたのではと思います。」と話をいただいた。

学生の汎用的能力を育成していくにあたり、どのような教育的指導が効果的なのか考える機会を設けることができた分科会となった。



分科会 B-2

▶ 学生への効果的な活用方法

アセスメントが広げる学生の未来

【参加校】 愛知工業大学 宇都宮大学 桜美林大学 杏林大学 慶應義塾大学 工学院大学 成城大学

高崎商科大学 東邦大学 東京家政大学 東京農工大学 獨協医科大学 平成国際大学

北海学園大学 武蔵野大学 立正大学 ※50 音順

(司会 ベネッセ i-キャリア)

テーマ1 受検や結果への関心を高める工夫

ディスカッションに先立って、アセスメント結果のフォローアップに特徴がある2大学から事例の発表があった。

桜美林大学は、1、2年次の年度初頭に実施からフォローアップガイダンスまでを行っている。自身の資質・能力を把握したうえで授業に臨んでほしいというねらいだ。入学定員の大きな学群では、このフォローアップガイダンスについて学生生活に対する満足度などの回答結果を基に学生をグループ分けして実施。傾向が近い学生が多いため、グループディスカッションが盛り上がったという。また、紙でのテスト実施からCBTに切り替えたことにより、フォローアップガイダンスの出席者が約2,000名と昨年度比3倍以上に増えたという。アセスメントの受検結果がすぐに出るため、学生の関心が高いうちに開催できた点が好意的に受け入れられたようだ。

平成国際大学は、アセスメント結果を就職支援説明会内の保護者面談に活用し始めたことを報告。「取得単位数やGPAとあわせてGPS-Academicの結果を聞くことで子どもの成長がわかりやすい」「高校までの通知表の代わりになる」と好評を得ている。

学生や保護者のアセスメントへの関心を高めた両大学の取り組み事例を受けて、最初の議題となったのは、受検率や結果説明会への参加率を高める工夫についてだ。

受検率90%以上という杏林大学は、就職に結びつけて受検の意義を学生に説明している。「自分の資質を客観的に理解することの大切さや、企業が求めている資質について話しています」。保護者向けに実施案内を発送しているのは北海学園大学。「これからの学生生活の過ごし方や、社会で必要な力を知るきっかけとなります」と、学生に受検を勧めるよう促している。

テーマ2 スコアに影響する姿勢や行動を探る

2つめのテーマのきっかけは、高崎商科大学から「スコアが伸びた学生は何によって伸びたのか、その要因を分析している例はないでしょうか」との質問だった。低いスコアの項目がある学生に対してどのような取り組みを指導すべきか、学内で議論になったという。これに対し、このテーマを研究中だという工学院大学から「測定項目に影響する

要因として、その力を鍛える機会があったか、あった場合はどんな姿勢で臨んでいたかという2つの軸がある」という仮説が紹介された。

続いてベネッセ i-キャリアの社員が、GPS-Academicにおいて思考力上位の学生と下位の学生にある差を分析した例を提示した。スコアが50以上の学生は50未満の学生に比べ、「ニュースを見たときに、背景を考えた」「わからないことについて、様々なソースの情報を集めた」といった探究的な学習行動を取る割合が高いという内容だ。

会場からは、「スコアと関連する姿勢や行動がわかれば、授業やフォローアップ時にそれらを学生に勧めたい」という声が複数挙がり、このテーマへの注目の大きさが伺えた。

テーマ3 キャリア教育や日常的な指導に活用

本分科会の参加大学には、学生向けガイダンスを行う以外にも、アセスメントを様々な形で活用している例が見られた。

インターンシップでの活用例を示したのは北海学園大学だ。企業に対して、アセスメントの測定項目のうちインターンシップで経験できるものを事前にヒアリング。学生はその内容と自身のアセスメント結果を見比べることにより、「強みを伸ばす」「不足している力を鍛える」といった観点でインターンシップ先を選ぶことができるしくみだ。

同じくキャリア形成についての活用例として、杏林大学が続いた。業界ごとに必要な能力は異なるという仮定の下、実際の就職活動におけるジョブマッチングでの活用を進めている。現在、各業界がどんな測定項目を重視しているのかを分析中だ。

高崎商科大学では、創造的思考力とリーダーシップに関してテスト結果と自己評価にギャップがあり、普段の印象とは異なっていた学生達が、それぞれ異なる能力の強みを組合せて3チームを結成し、ビジネスコンテストに3ヶ月間取り組んだところ、めだたなかった学生がリーダーシップを発揮したり、チームにねばりがみられるなどして全てのチームが見事優勝をはじめとして入賞を果たすことができたという。

「スコアが高いがそうは見えない学生がいるときに、チャレンジを勧める根拠として活用できそうです」と日常的にアセスメントの結果を活用する大切さを示すエピソードが披露された。